思わず続きが書きたくなる
―小説「小さな手袋」の学習指導―

奈良県山辺郡山添村立山添中学校　宮久保　ひとみ

はじめに

小説を集団で学ぶ醍醐味、それは互いの経験値や価値観を交流し合い、考えを深める楽しさにあるのではないか。日頃はライトノベルズを好む生徒が多いが、共に小説を学ぶ意義を体感させる取組として、今回は二学年「小さな手袋」の学習活動を紹介したい。

一　小説の系統的指導を意識する

平成二四年度版三省堂「中学生の国語」一年～三年では、小説は後の太枠内のように配されている。囲みを付けた三作品は、比喩表現が巧みで、登場人物の描写もしっかりしている。また、この後どうなるのだろうという結末が生徒の興味を引き、読後に余韻を残す。

生徒の初発の感想も、人物の言動や心情について、また、なぞを残した結末について多様なものが見られ、それらを基にして学習計画を立てると、生徒の関心や意欲を高め、効果的である。指導の際、次の三点を意識した。

主　主となる学習課題
副　学習課題を解決するための補助課題
結　余韻を残した結びについての課題

これらを三作品に当てはめてみる。（＊は新出作品。○は既出作品。）

［一学年］
○別役実「空中ブランコの乗りのキキ」
主「なぜキキは命を懸けてまで四回宙返りをしたのか。
副「第四の意味段落をさらに二つに分けるとすると、どこが適当か。」
結「白い大きな鳥は、キキなのか。」
＊重松清「タオル」
○芥川龍之介「トロッコ」
［二学年］
○太宰治「走れメロス」
○内海隆一郎「小さな手袋」
※主　副　結　は後述する。
＊小澤征良「蒼いみち」
［三学年］
○トーベ・ヤンソン「猫」
主「結局、だれの心が変わったのか。」（猫は変わらず、主人公の心が成長。）
副「野性的な猫、マッペと素直な飼い猫スヴァンテを比べよう。」
結「この後、話はどう展開するのか。」
＊森鷗外「高瀬舟」

二　作品について

この小説は、祖父の死を体験し、それまで交流していた老女との交際を絶ってしまう小学生の娘シホを、終始優しく見守る父の視線から書いたものである。小学校三年生で老女と出会い、六年生で思い出すが、老女は認知症になっていた。その出来事を父が改めて、

六年前の追憶として語る。

ということは、シホは小説の中では中学三年生。生徒は自分の小学生時代から現在、そして、未来にまで思いをはせながら読むことができる作品なのである。

三　指導の実際（全五時間）

＊新出漢字や語句の確認は予習扱い。

第一次　（一時間）

1

・全文を通読し、ストーリーの展開に合わせた小見出しを各自考え、グループで意見を出し合い、最善の小見出しを決める。

・登場人物に対する疑問を、「なぜ～は～したのか。」という形で書き出す。

第二次　（三時間）

2　前時の疑問を基に、主・副・結の課題を確認する。

主「なぜシホは祖父の死後、宮下さんに会いに行かなくなったのか。」

副「夫婦がシホに真相を聞けなかったのはなぜか。」

結「この話の続きを書いてみよう。」

3　シホの心情の変化と父の思いを読む。

4　病院で話を聞いたシホの心情と父の思いを考える。

第三次　（一時間）

5　話の続きを考えて書き、交流する。

［条件］

・父親の語りとして書くこと。

・設定は、雑木林に入った直後でも、ずっと先のことでもよい。

◆病院を辞去し、再び雑木林に行ったシホは涙を流した。ミトンの手袋を顔に強く押しつけ、声を上げずに静かに泣いていた。宮下さんへの感謝、後悔、自責の念が交差し、流れた涙なのだろう。遠目からシホを見ていると、シホは一本の木に駆け寄っていった。その木にそっとふれたシホの口が「ありがとう」と動いた気がした。きっとあの木が、シホと宮下さんが時間を共有した木なのだろう。

「シホ、行くぞ。」

私が声を掛けると、シホは満面の笑みで

「うん。」

とうなずいた。祖父が亡くなってからしばらく影を潜めていた娘の笑顔を見たのは久しぶりだった。小三のころ、宮下さんのことを無邪気な笑顔で話してくれたあのころのシホの姿が脳裏をよぎった。目の前にあの頃と同じ笑顔があることに、今度は私が涙してしまいそうになった。（後略）　（生徒作品1）

◆あれから五年。シホと私は大連に来ている。それもつい先週、入院していた宮下さんが亡くなったことがきっかけである。シホはあのプレゼントをもらった日から毎日のように、宮下さんのもとへ通っていた。しかも、シホといっしょに話をしているうちに、認知症が回復傾向にあった矢先のことだけに、祖父のときと同様に、いやそれ以上の悲しみを見ていて感じた。私はまた、ショックでシホに何らかの変化が起きることを心配したが、数日後、彼女は「大連に行ってみたい。」と言い出した。ちょうど夏休みでもあった。

今見ている大連の景色は、宮下さんの知っているものとは違う。しかし、シホには、おばあさんが見ていた当時の大連が見えているようでしかたなかった。　（生徒作品2）

おわりに

五時間め。黙々と書き始める生徒たち。全員がシホの気持ちを想像し、彼女を見守る父の立場で書くことができた。作者の文体さながらに。作者の筆力のなせる技か。優れた作品は、生徒の想像力を育てる。作者の他の本や森絵都、重松清ら、ストーリー運びの巧みな小説家の本を朝のブックトークで紹介したところ、生徒の読書熱を上げることができた。

みやくぼ　ひとみ　平成一五、一六年度に「国語力向上推進モデル校」指定を受けて以来、「全校態勢で育てる言葉の力」を研究テーマとしている。